C 8　家庭科教育における「保育」領域の研究〔5〕－教師の保育教育観（2）

上越教育大　○大瀧ミドリ　宇都宮大教育　金崎芙美子
東京家政大家政　川合貞子　都立久留米高　栗名有米子

目的・方法：小・中・高の家庭科担当教師を対象として保育教育の男女共修に対する教師の意識と学校段階・所在地・年令・価値観・性差認識・教育観など教師及び教師をとりまく諸要因が、どのように関連しているかを明らかにすることが、本研究の目的である。研究方法は、報告〔4〕と同様である。

結果：①学校段階＝教師が所属する学校段階との関連についてみると、小学校の教師は、中・高の教師に比較して、中・高での保育領域の男女共修に賛成する比率が有意に高い。

②所在地＝学校の所在地との関連についてみると、栃木・新潟の教師に比較して、東京の教師の共修に賛成する比率が高い。

③年令＝教師の年令によって45歳以下群と46歳以上群の二群に教師を分け、保育教育の男女共修についてみると、45歳以下の教師の共修に賛成する比率が高い。

④価値観＝価値観に関する項目では、子育てに対する考え方について有意な関連がみられる。即ち、共修に賛成する教師は、これからの子育てにおける「父親の参加」「母親の自己充実」が図られると考えている。

⑤性差認識＝教師の性差に関する認識との関連についてみると、共修賛成群の教師は、他群の教師に比較して、「性による役割の分担はすべきでない」さらに「男とか女とか意識せずに、一人の人間として育てる方がよい」と考えている。

⑥教育観＝共修賛成群の教師は、他群の教師に比較して、本研究で提示した保育教育のあり方に対してその必要性を認めるものの比率が高い。